

.....

この旅は55日間、関西空港から、デンマークへ。
スカンジナビア半島の最北端ノールカップを目指すのが、今回の取材目標。
フィンランドから北極圏、ノールカップに到達。
厳しい体験だった。自動車の窓ガラスが割れるなど初めての体験。
強風で車が横に移動。横転しないかと恐れた。春の嵐。
いろいろ体験しただけに、充実感や達成感のある取材旅になった。
季節は6月。

北極圏であるノールカップの空は、どんよりとした冬空。
曇天で、からりと晴れるような状況ではない。
明るさからもほど遠い無彩色の世界。
しばし達成感と充実感を味わう自己満足のひととき。
そして、南下を開始。道草を繰り返し、港町ベルゲンをめざす。
心をなごましてくれる雪もまだらになり、
贅沢な景観や雪の光景を見慣れている私には、心が弾まない。
景観は今一つという状況がつづく。修行のような旅。
自分で自分を元気づける旅がつづいた。

南下にしたがって、明るくなるような気がする。
春を待ちわびている私には、期待が広がる。
北欧の春は、日本の春のように華やかさは期待できないかも。
春遠からずの季節。湖水の氷も融けはじめた。
草花も芽を出してきた。鳥たちも飛来してきた。
しかし、北欧の空は、なんとも暗い印象を受けた。
日本では、春ともなれば華やかである。曇天がつづいた。

なかなか、シャッターチャンスがない。
それでも心が命じた、フィヨルドの感動を
フィルムスケッチする。

日本に比べれば、すべてが広大だが、
大味で、繊細さがない。
それだけに壮大なスケールの光景には心惹かれる。
同じような景色が続く。ゆっくり海も見たい。
少し休憩をとることにした。そして、海の見える小山に登った。
直感だった。眼下に広大な景観が広がる。

さて今夜はどこまで行こうか。
まだ、宿も決めていない。北欧とは言え、厳寒の冬ではない。
なんとかなる。西の空がますます明るくなって来ている。
夕陽やサンセット、刻々と変化する日没は、なんとも夢とロマン。
夕陽を見たいが、この雲が邪魔をするだろう。
大きくは期待できない状況だった。
駄目なら駄目でいい。このひとときを楽しむ心の余裕がある。
心は青年。若者ではない。大の大人である。

この日の雲の形状は、帯状の形をしていた。
形容の仕方がなんとも難しい。最初は、雲の切れ目はなかった。
曇天である。天空高くではなく、低くたれ込めている。
少し、西の遠方は明るくなった。時計は4時。

私はどうも滅び^{ほろ}びに美学を感じる傾向にある。
はかない、消えて行く、その実感を味わうのが好きなようだ。
いつか散るから、花が愛おしいように。
孤独があるから人も愛おしく感じる。幼少からつづく。
現実には、夢とロマンをかき消すことが多い。

そもそも夢挑戦した背景に、松尾芭蕉への憧れがある。
それは文化への憧れ。西行、良寛、一茶、山頭火、哲学や禅のころ。
所有から存在、アイデンティティーを求めて、魂の世界をさまよう。
栄枯盛衰、はかなさ故に、一瞬の価値が増す。
地球の、宇宙の、自然の瞬きをとらえるのが私の使命かも。
この一瞬に、様々なメッセージが込められている。

こんなに遠くまで、何をしに来たのか。

ノルウェー海に面した小山の^{いただ}頂^きでひとり座禅。

脳裏を、頭の中を、様々なことが駆け巡る。

どれだけ時間が経ったのだろう。

やがて、何も感じない、頭が空っぽになったような感じ。

なんとも贅沢な旅である。

眼前の景観は、刻々と変化する。スピードも増してきた。

風を肌を感じる。雲が動き始めた。

そして、雲の隙間から、不意に鮮やかな光が見えた。

思わず目を凝らした。瞬間、心にスイッチ ON。

水平線の現象ではない。今までに目撃した景観ではない。

初めて見る光景。変化も速い。息をのんだ。

いつも、主導権は自然にある。思い通りに行かない。

真剣勝負が始まった。一期一会。出来れば、1枚で決めたい。

それは、心がこもるから。

これまでにチャンスを何度も失敗している。幻の光景も多い。

緊張感が増す。^{こんじき}金色の色彩も増す。人工的でない色彩。

変化の加速度も増して来た。その輝きは^{こんじき}金色。

こんな瞬間があるから、この一期一会の出会いがあるから、

夢挑戦がつづけられた。単なる情報発信ではない。

たかが一枚、されど私には価値のある一枚。心象アートである。

まさに、ラッキー、スマイルオンミー。

写真作品ではもったいない。夢絵作品にしたのは言うまでもない。

科学の洋のアートが、和の芸術になる。

華麗な変身。顔料は百年、純^{こうぞ}楮^す寒漉き特注和紙は千年持つ。

素晴らしいモチーフを、自然から拝領。

次の使命は、シェアー。一隅を照らす。

この「金色の海」のモチーフ、夢絵創作だけでは飽き足りない。
もしスポンサーがつけば、つづら織りの風炉先屏風、はじめ、
緞帳にもと夢を描いていた。

カナダ作品「森の妖精」 ポルトガル作品「カモメと少年」
コンサートホールの幕にも…

この眼前で展開される光景を見ていて、
静かなクラシック音楽が聞けたら最高ではないか。
北極圏の無彩色な曇天を見ていただけに、
この色彩のギャップは、言葉で表せない感動がある。
このまばゆい残像は、色あせない心の財産。
大自然が造り上げた壮大な作品。
ワンマンショーでもある。

一期一会のはかなさ故に、何か残したいと思うのは、
大きな欲、実現できれば嬉しいのだが。
それほど素晴らしい光景と思うのは私だけだろうか。
共感を感じていただける人がいて欲しいと切に願う。
金色の海、私の宝物。ありがとう。

このやすらぎ、癒し系の作品、多くの人にご覧いただきたい。
緞帳でなくていい。風炉先屏風でなくていい。
夢絵でなくてもいい。写真でも、ポストカードでもいい。
こんな美しい自然の瞬間が、この地球上にある。

虚像ではない。永久に見られる光景であることを切に願う。
それを決めるのは、一人一人の人間の努力と実践。
自然は、人間がいなくとも生きられるし、必要としない。
人間は、自然なしには生きられない。